

越前における法華信仰の展開

敦賀鑄物師地区の小型石造物考

古川元也

The Development of Hokke Sect in Echizen

はじめに

- ① 鑄物師地区の小型石造物
- ② 敦賀に於ける法華宗の展開
おわりに

【論文要旨】

越前敦賀の鑄物師地区には多くの板碑型・石龕型墓石や石仏が合祀されている。これらは地中から見つかったものが多く、上限は応永三十二年から下限は弘治三年に至っている。本稿はこれら石造物の悉皆調査の成果に基づき、第一章で詳細の報告を、第二章でこれら遺物存在の歴史的背景を考察するものである。

第一章では鑄物師石造物の詳細を述べる。石造物の特徴を略述すれば、石造物身部に五輪塔や笠塔婆を刻み、しばしばそれが双塔であることであり、また、多くが「南無妙法蓮華経」の文字すなわち題目を刻む点である。これら法華の特徴を持つ石造物は年紀を記すものも多く、この点から編年を作成すると、笠塔婆・石龕型・板碑型の順になり、約一三〇年の間に分布が収斂する。加えて、題目を刻む点や、法華宗に特徴的な笠塔婆が多く含まれる点に着目すれば、中世後期の法華信仰の広がりが考えられるが、都市敦賀は度重なる戦禍や空襲により中世文献史料の多くを失っており、こ

れら石造物を直接に裏付けることを困難にしている。

そこで第二章では石造物の現在の分布・出土状況を数少ない史料とつき合わせることに、中世後期における都市敦賀の法華信仰を考察した。ここでは法華宗内部の門流という考え方が有効な手掛かりを与えてくれることを示した。敦賀における法華宗寺院は、本国寺門流（六条門流）と妙顕寺門流（四条門流・日像流）の二つの門流から成立しており、これら石造物を残したと思われる大乘寺が、唯一本国寺門流である点に着目した。現在墓石が残る地区には大乘寺は存在しないが、一方の四条門流の諸寺院は従来とほぼ同じ敦賀中心部で活動をなし得ている。これら両門流の明暗と大乘寺跡に石造物のみが残される点を整合的に解決するためには、朝倉氏による支配が終焉し、織田側勢力が敦賀に入市した際の城下整備と寺院の処遇が重要な役割を果たしている」と結論した。